都の色

池田 知隆
（ジャーナリスト・一般社団法人大阪自由大学理事長）

自然や周りの景色を見る眼を一変させられたことがある。

もう三十年近い昔になるが、京都・嵯峨野に住む染織家、志村ふくみさん（人間国宝）のお宅を訪ねたときのことだ。機織りの手を休め、藍染めの着物姿で現われた志村さんは「私、本質的にシャーマンじゃないかしら。そう感じることがあるんですよ」と、にこやかに語りだした。

ふと、軒先に吊るしてあった緑の糸が目を引いた。「鮮烈な緑ですね」と訊くと、志村さんは「色はただの色でなく、木の精なのですよ」という。えっ、色は木の精……。

「そう。植物から緑の液を絞って染めても、糸に付いた途端、ネズミ色になります。ピンクの花からもピンクの色はでません。幹に蓄えられていたものが花にでてしまうと、死んだということなんです」。

では、あの鮮やかな緑はどうして……。

「藍に黄色をかけているのです。藍は闇に最も近い色。黄色は光。ですから、闇と光が結合したときに緑が誕生します。生と死との接点がそこに存在しているのです。藍を単に色彩としてではなく、生き物として捉えています。生き物は人間の心を反映し、藍を守り、藍を育て、染めている人の人格と、その藍はほとんどいっしょ。藍は汲めども尽きない性質のもので、ミクロコスモスの世界が凝縮しています」

清酒 富翁 トミオー
すゝめても すゝめられても うまい酒
京都・伏見 北川本家醸

日本の色には、「カラー」という言葉で言い換えられない繊細で深い世界がある。都会では多彩な色があふれ、そのすべてが表面に塗られた色ばかり。でも、月夜の青さや、夕日に染まる海の色など大自然の色彩は、決して塗られた色ではなく、「宇宙の底から染め上げられた色」である。そう語る志村さんのひと言ひと言が、周りの情景とともに甦ってくる。朝夕、四季折々の草花に囲まれ、それを拝み、生きている志村さんが自らを「シャーマン」というのもストンと腑に落ちた。

九州で育ち、東京の大学で学び、大阪で社会部記者として駆け出し、京都にたどり着き、初めて出合った言葉の数々。いい話を聞けたな、と新聞記者という仕事の喜び、至福感を味わったことも懐かしく思い出される。

新型コロナの感染拡大によって京の街角から一時、人通りが消えた。外国人観光客が殺到していた祇園も例外ではない。春を呼ぶ風物詩「都をどり」が中止され、静けさに包まれた。「ヨーイヤサー」の掛け声で爛漫の春が繰り広げられるあの華やかな舞台は来年こそ、京の街を鮮やかに彩ってくれるだろうか。

志村さんの表現を借りれば、京の自然を「藍」とすれば、その地に生きる人々の息吹が「黄色」で、それが結び合って街の「いのち」が生まれる。京都という街もまた「生き物」である。観光とは、土地の〝光〟を観ること。コロナ後、京の都でどのような〝光〟や〝色〟が見えるのか。時の流れに耳を澄ませながら、新たな京の魅力を発見したい。